6.13　げてむ

先日の話（戦「死のうは一定」参照。）で触れた、人間五十年の文章ですが、
「人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。」
これは、「信長公記」の文章。

「人間五十年、化天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。」
これは、「敦盛」の文章。
どこが違うのか？
信長公記で「下天」とあるのが、敦盛では「化天」となっていますね。

これ、昔から専門家の間で議論があるところだそうですが、
両者の元になった幸若舞は、口承伝承のため、敦盛の台本では「げてむ」となっていて、
下天とも化天とも読めるのですね。
この議論、20 年ほど前に、ある小説家が信長を描いた小説「下天は夢か」を日経新聞に連載して以来、すっかり、世の中では「下天」一色になってしまいました。

ところで、下天と化天はどう違うのか。
易しく説明するのがちょっと難しいのですが、
まず、天界の説明から。

私たちの魂は、肉体が滅んだあと、次の六つの世界のどれかに行くことになるのですが（輪廻）、生前の行い等によって行くところが違うことはご存じですよね。
それらの世界には順序が付いていて、下から順に、地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天上界となっているらしいのです（六道）。
この最上位にあるのが、天上界。

ところで、人間界には、序列がないのですが、
え、ある？
いやいや、今お話ししているのは、仏教のお話。

なんと、この最上界に当たる「天上界」には厳しい順序序列があるのです。
下から「六欲界」「色界」「無色界」。
どう違うかって？

まあ、行ったことがないから、よくわからないけれど、心の中に欲が残っているのが「六欲界」、肉体が残っているけど欲は無くなっているのが「色界」、肉体も消え精神だけが残るのが「無色界」。ちなみに、色界の最上位が「有頂天」。
わかります？
わかりませんよねぇ。

欲が無くなって何が楽しいの、と思ってますからねぇ。

三つの一番下に当たる「六欲界」も、中が六つに分かれ順番がついていて、その中の一番下（つまり天の中で一番下）が「下天」、「化天」は上から二番目といわれているのです。
どう違うか？

わーかりませーン。
どれほど欲が残っているかどうかで違うって言ってましたよ。
私なんか、欲がなくなっちゃうんなら、天界は勘弁してもらいたいなあ、と思ってるんですがね。ナイショの話。
え、心配しなくても行けないって？

それはさておき、「下天」の正式名称は「四大王衆天」。つまり、四天王さんたちが住んでいる天界ですね。四天王、つまり、持国天、増長天、広目天、多聞天。
みんな怖い顔をしていて、仏法の守護がお仕事です。でも、食欲、色欲等はあるらしいです。この方々、寅さんで有名な帝釈天さんの部下ですね。

一方、「化天」の方は、正式名称「楽変化天」略して「化楽天」。
自ら楽しい境遇をつくり楽しむことができる天界だそうです。
そういえば、図々しくも、この言葉を使っているＩＴ企業、ありませんでした？
行ってみたら、〇木谷クンによく似た下品な天人が君臨してるかも。アハハ

さて、問題の「げてむのうちをくらぶれば」の寿命の点ですが、
下天に住む天人の寿命は 500 年、化天に住む天人の寿命は 8000 年。

ただし、人間界の 50 年は、下天の 1 日に相当するようですから、
下天の天人の寿命は、人間界に直すと　　50×360×500＝900 万年？
まあ、化天は計算するのがバカらしいほど、エラク長いということですね。

ところで、あなたは、どっちだと思いますか？
下天派？　化天派？　どっちでも良い派？
私？
私は下天派。
理由？
私の家、浄土真宗なんだけど、石山本願寺を建てた蓮如上人が
「それ、人間の五十年をかんがへみるに、四王天といへる天の一日一夜にあひあたれり」
とおっしゃってるんですね。

やっぱり、自分ちの派の上人さんの言うことを無視できませんものね。
ただね、石山本願寺、信長クンと対立関係にあったから、変かなあ。

9.24　四途？の川

今私たちが生きているこの世と死後のあの世の間に、川が流れているというのは、日本だけではなく、世界のあちこちに伝えられている伝承です。

その多くが、記録などなかった時代からの言い伝えなのですが、別に交流がないのに、世界中で、川が流れていると伝えられているのだから、これは、やっぱり、死にかかって、戻ってきた奴が、こっそり漏洩したに違いないと私は思うのです。

当然、そ奴は、最高検の大王閻魔検事総長によって、秘密漏洩の罪で起訴され、次は地獄行き無期滞在の判決が下ったに違いない。
死刑判決は意味ないしね。

ところで、その川には、橋が架かっているという言い伝えがあるのだけれど、この橋、善人が渡るときは幅が広くても、悪いことをした人が渡るときには、悪いことをした分だけ幅が狭まって、遂にはある程度以上幅が狭くなると、川に落ちて地獄に流されてしまうという仕組みとなっているそうです。
心当たりがある方は、地獄に流されてしまわないよう、お子さんに、棺桶には、救命胴着を入れておいてもらうよう、今から頼んでおきましょう。

ギリシャの言い伝えでは、川に渡し船があったりするのだけれど、これは有料。
「地獄の沙汰も金次第」って言うのは本当のことらしいので、少しは棺桶にお金も入れてもらいましょう。

円安になるのが心配？
そういう方は、金貨にしましょう。

日本の場合は、この川、「三途の川」と言われていることはご存知ですね。
「三途」というのは、渡河に、三つの場所と方法があるという意味ですね。
先ほど述べたように、ある程度の善人様は、橋のところに案内される。

明らかな悪人共が案内されるのは、急流で深い場所。これはなかなか渡れないようです。
思い当たる方は、今すぐスィミング･スクールに申し込んで訓練しましょう。

善人でもないけど、悪人でもないという中途半端な人生を送ってきたあなた！
あなたには、それなりに、川の流れが緩やかだったり、それなりに浅いところに案内してくれる。
まあ、出来る限り、浅くて、緩い方が良いから、今からでも遅くない、一日一善に励みましょう。

ところで、最近（といっても､室町時代のようですけど)、この「三途の川」に、渡し船が運航されている模様なのです。
ギリシャの言い伝えと同じ途ができたみたいなのです。
これは、まだきちんと公式報告されていないので､「四途の川」と名称変更されていないのですが、どうも噂では、運賃は 6 文のようです。

今のお金でいくらになるか？って。
さぁ。

私は、もう、昔の寛永通宝で 6 文用意しました。
昨年、四国八十八カ所巡礼で行った「本山寺（70 番札所)」で､しっかり入手。

でもね。
さすがに、本山寺の「六文銭の由来」には､渡し賃のことは書いていないので、ちょっと心配。

やはり、渡し船は公認されていないのですかね。

9.26　六道銭

先に書いた「四途？の川」について、少しだけ追加したいと思います。

三途の川の渡し船に乗るための運賃 6 文のことです。
この渡し船、ひょっとしたら「白タク」営業かも、と不埒なことを臭わす言い方をしましたが、運賃が 6 文というのも噂にすぎません。

室町のころ、渡し船が出来たという人(僧)がいて、誰も乗ったという報告がないのに、いつの間にか、運賃まで伝わってきて、今や、私の周りには、これを疑う人は殆どいないほどになっています。

でも、昔から（といっても平安のころですけど)、6 文かどうかは別として、あっちの世界に行くときにはお金を持たせてください、ということは言われていました。

これ、「六道銭」と言われていて、あっちの世界で支払う必要のあるお金と言われていました。

ちょっと難しくなるけど、あっちの世界にも、クラスがあって、そのどれに行けるかは、努力次第となっていたんですね。

今は、えーと、正確に説明するのが面倒なんで、どうもわかりやすく地獄と天国の二クラスにしているけど、本当は、六クラスなんだそうです。

優等生が入れるのは、もちろん天(道)クラス、そこまで行かないけどまあまあまじめに努力した人は人間(道)クラス、以下順に、修羅(道)クラス、畜生(道)クラス、餓鬼(道)クラス、そして、一番のオチこぼれ組が地獄(道)クラス。
この六つのクラスを指して六道と言っているのです。

そしてここからが大切なんですが、あっちの世界に行った人も、クラスが変わったりするようです。いつになるかは別として、こっちの世界に戻って来ることもできるようです（輪廻)。
ところで、一番肝心の大切な情報は、それを仕切っているのがお地蔵さんという点。正確に言うと地蔵菩薩さん。

そこで、死後この地蔵菩薩さんに差し上げるお賽銭（ワイロではありません）を「六道銭」と呼んだらしいのです。
そういえば、あちこちに「六地蔵」さんが祀られているけど、近くにある、あると今思った皆さん、今のうちから「よろしく」と言っておいた方がいいのではないでしょうか。

子供の頃、お地蔵様に供えてあったミカンをこっそり取った記憶のあるあなた！
まあ、このままだと餓鬼道行き間違いなし、ですね。

ところで、有名な真田の旗印は「六文銭」と言われることが多いのですが、正確には「六連銭」といって「六道銭」なんですね。
ですから、よく見ると真田の銭には紋がない、つまり「無紋銭」。「六文」ではないんですね。写真

あ、そうそう、天(道)クラスに入ったからといって安心してはいけないんですね。
ちゃんと、天人にも、寿命というものがあって、寿命が来ると死んでしまうのです。
三島由紀夫さんの小説に「天人五衰」っていうのがありますね、これは、天人が亡くなるときに表れるという現象なのです。

天人が死ぬとどうなるかって？
私に聞かれても困りますが､行い次第で､別のクラスに行かされることもあるようですよ。

この「輪廻」っていうの、考えてみれば、天人になっても永久にいつも努力していなければならないということのようで、何か恐ろしい気がしますね。

これより、前にお話しした「渡し船の運賃 6 文」の方が、わかりやすくて良いみたい。

努力しないで、ゴロゴロしているそこのあなた。
え、私も？
仕方ないから、渡し船があることを信じて、行きましょう。
運賃 6 文、用意しました？

えー、以上のことは、行ったことがない私には保証しかねますので、念のため。

3.6　泥(どろ)と泥(でい) 6.27

先日、我が家に、「泥パック」なるしろものが届きました。「死海の泥」ですって。
何、コレ？　知ってました？

いい歳をして、泥パック？
なんてことを言ったら、たちまち内戦勃発間違いなし。
なんと言っても、財源を握る政府軍が圧倒的に強いのはどこの国でも同じだから、ここは触らぬ神に祟り無し。ひたすら、そ知らぬ顔をするとしても、ホントに効き目があるんですかねぇ。

「泥」という字は、「どろ」と読むときと「でい」と読むときがあるけれど、「どろ」と読むときはたいていロクでもないことが多いんですがね。
ですから、これ、「どろパック」と読むより、「デイパック」と読む方が効き目があるような気がするけれど、それでは「日帰りハイク用リュックサック」になっちゃうか。

「でい」ですぐに頭に浮かぶのは、昔覚えがある「泥酔」。
この「泥」を「でい」と読むのは誰もが知っているけれど、これが生き物だということは殆ど知られていませんね。

え、そんなのいるの？
ええ、「泥」は、南海に住むと言われている空想上の生き物のことですね。
昔の飲み助は、酔っぱらって正体をなくした自分は、この「でい」のようなものだから大目にみてよね、なんて言ってたんですがねぇ。

南海有蟲無骨。名曰泥。在水則活。失水則醉。如一堆泥。　〔異物志〕
（南海に蟲ありて、骨はなし。名づけて泥といふ。水にあればすなわち活し、水を失えばすなわち酔いて、一堆泥の如くなり）

まあ、これによれば、骨のないグニャグニャした虫のような生き物で、水中では活発に動き回るが、陸に打ち上げられると、途端にグデングデンになって酔いつぶれたように動かなくなってしまうと言うもののようです。

唐の詩人、杜甫、李白、白居易の三人が三人ともに、この「泥（でい）」を歌っていますから、昔から由緒正しい、愛すべき生き物だったようです。

三人の中で、断トツの飲み助は「李白クン」。
毎日のように酔っぱらって、奥さんには頭が上がらない。
李白の五言絶句に「贈内」というのがあるのですが、
内は（つま）、つまり家内（奥さん）のこと。これは奥さんに贈った歌。

三百六十日　　日日醉如泥
雖爲李白婦　　何異太常妻
［一年中　日日に醉ひて泥の如し　李白の婦爲（な）ると雖（いえど）も　何ぞ太常の妻に異らん］
［拙訳］
（一年中、毎日酔っぱらって、でい（泥）のようになっているけど、これじゃあ、李白の妻だといっても、名前だけのこと。構ってあげられないのは、すまないなぁ。ゴメンネ）

「太常」は、宮中で、帝の祖先を祭る役職。一年のうち 359 日は斎をし、残る一日は酒を飲んで過ごすので、「世に生まれて、たのしまざるは太常の妻となることなり」と言われていたのですが、これを踏まえて、李白は、自分の場合は、360 日飲んで酔っぱらっているから、これと変わらないなあ、ゴメンナサイと謝っているのですね。
1 年が 360 日なのは、陰暦だからです。

次に、杜甫クンの場合、「厳鄭公に寄す 5 首のうち第三首」の一節

肯藉荒庭春草色
先判一飲醉如泥
［肯て荒庭の春草の色を藉(し)いて　まず一飲、酔うて泥の如くなるを判(はん)せんや］
［拙訳］
（我が家の荒れた庭にも春の草が美しい季節になりました。その春色の草を敷いた上で、まずは一献やりましょう。正体をなくして泥のようになるまで、楽しく酔いましょうよ）

最後は白居易クンの歌。「酬李二十侍郎」の一節

十年分手今同醉
醉未如泥莫道帰
（十年 手を分かちて 今同じく酔う 酔うて未だ泥の如くならざれば帰らんというなかれ）
［拙訳］
（君とは十年も別れていて、いま久しぶりに飲むのだから、泥のように酔いつぶれるまで帰るなんていわないでくれるかなぁ。）

ところで、泥棒の「泥」は、顔を隠すために泥を塗ったことによるものなので、こちらの方は、「でい」ではなくて、「どろ」。

最近の政治に見られる「泥仕合」の「泥」と同じですね。泥にまみれて、相手の汚れたところを暴き立てることに終始する争いのことですね。

今は、「でい」より「どろ」の時代なんですねぇ。

6.1　琵琶湖疎水と家守綺譚

今日は、妖し（あやし）の世界に興味のない方には、面白くも何ともないお話。

梨木香歩さんは、私の好きな作家の一人ですが、
彼女の作品には、しばしば「異界」というのでしょうか、こちらの世界とは異なる世界が出てきます。

私は、昔から、この異界の話というのが好きで、彼女の評価の高い作品「西の魔女が死んだ」より、「家守綺譚」や「村田エフェンディ滞土録」の方が好きなのです。
どれも読んだと言う方が多いと思いますが、お読みになっていない方のために、以下に独断的紹介。

「家守綺譚」の舞台は、今からおよそ 100 年前の京都山科。
主人公は、綿貫征四郎という売れない若い作家なのですが、彼は、亡くなった親友高堂の家に家守として住み、そこで起こった摩訶不思議な、しかしつい笑ってしまうような事件に次々と遭遇します。

私は、これらの奇譚を通じて、こちらの世界とあちらの世界、言い換えれば、現世の人間と異界のやりとりを通じて、人間の本来のポジションを理解することができたような気がしています。

ところで、この亡くなった彼の親友高堂の家は、琵琶湖疎水のすぐ近くにあり、疎水の水を庭の池に取り込んでいるのです。
昔この辺りをよく歩いたことのある私には、この場所、山科安朱の辺りのような気がするのですが、これは私の単なる想像。

それはともかくとして、彼の親友高堂は、数年前に琵琶湖にボートでこぎ出したまま行方不明となり、現世では死んだことになっているのですが、征四郎が家守となって移り住んでまもなく、突然、床の間に掛けてあった掛け軸の絵の中から、舟に乗って現れるのです。
もちろん、琵琶湖から疎水を通って、掛け軸の池の中から。

彼が現れて以来、家守生活は一変します。

彼が「庭のサルスベリがお前に懸想している」と征四郎に告げる話から始まって、
彼に言われて飼うことにした犬のゴローとカッパの話、優しい心根の狸の話、人をくったような和尚さんたちが登場する 28 編が、花の名前を付けられて語られます。

私が一番好きなのは、松茸狩りに出かけた征四郎が、身体の具合が悪くなった尼僧を介抱する話（ホトトギス)。

実はこの尼僧、狸が化けていたのですが、七転八倒して苦しむ尼僧から、南無妙法蓮華経を唱えながら背中をさすってくれと頼まれた征四郎が、尼僧の背中をさすり、南無と唱える都度、尼僧は農夫へと、農夫から落ち武者へと姿を様々に変えていくのです。

驚天しながらも、背中をさすり続ける征四郎のそのときの言葉。
「これは人間のはずはない。しかしいかな化け物であっても、このような目の前で苦しんでいるものを、手を差し伸べないでおけるものか」

なんとか症状が治まって狸の尼僧は帰って行くのですが、その直後、お礼に、狸が持ってきて置いていった松茸を見た時の征四郎の言葉。
「私はなんだか胸を突かれたようだった。回復したばかりのよろよろとした足取りで、律儀に松茸を集めてきたのか。何をそんなことを気にせずともいいのだ。何度でもさすってやる。何度でも称えてやる。」

この 28 編の殆どは、現世に生きる征四郎と異界との交流の物語です。

自然の中で、生が死と隣り合わせにあることを感じていた少し前までの私たちの祖先たちの多くが、かぎりなく優しく、明るかった理由がよくわかるような気がします。

おそらく、私たちの祖先は、ついこの間まで、自然との間でこのような心の交流をしていたに違いないと思うのですが、自然に対してこれを征服すべきものと考えている西洋の文明が入ってきて以来、私たちは、みずから自然との対話を打ち切ってしまいました。

物質的には豊かになったかも知れないけれど、その代わりに精神的には貧しくなってしまった私たちには、いつの間にか見えなくなってしまった世界が本当にあることをこの物語を読んでいると確信してしまうのです。

日常の毎日で異界を感じなくなった私たちは、日常から「死」や「霊」や「自然」を閉め出し、滅多に生や死を考えたり、感じたりすることなく、ただ、日常にとって便利であるものに対してのみ価値を与え、それ以外のものに対しては見る必要も無いとし、顔を背けて暮らしているのではないかと思います。

この本を読むと、近代の扉を開けた琵琶湖疎水を通って、異界のものたちが、もうすぐそ

れが見えなくなる私たちにお別れの挨拶に来たように、私には思えるのです。

この本、今は新潮文庫で出ていて、たった？360 円で買えるんですね。
あ、そうそう、この本の中には、「村田エフェンディ滞土録」に出てくる村田学士が征四郎の友人として登場します。

しばらくぶりに、私も、土耳古（トルコ）にいる村田に会いたくなってしまいました。